No.13

古高取通信

平成24年12月

古高取を伝える会会報

目　次

古高取の魅力を伝える　・・・・・2
古高取の広場　・・・・・・・・・・・3
活動の記録　・・・・・・・・・・・・4
なんでも掲示板　・・・・・・・・・・8

「伝統は、持続・継続される」

五月と十月に伊勢神宮にお参りした。たまたま二度のチャンスがあっただけで、特別深い意味はない。

しかし、半年の間に二回もお伊勢参りをしたとなると、何か得るものがなければと思い、式年遷宮について、少々面白いことが分ったので紹介したい。

遷宮の二十年サイクルは大工の技術を伝承していくうえにも適切な長さだという。二十代の駆け出しの大工が、修行を積んで二十年後の四十代で、頭領になり、次の二十年後は大頭領となって、指導していく。また、社の材は、宇治橋の脇の大鳥居に使われる。百二十五の社を二十年間で順に変えていくので大工は常に技の伝承をしていくという。祭りの道具も二十年毎に千三百年前の（「延喜式」などに書いてあった）素材と色とデザインで全部新しくし、その時代の最高の匠に作ってもらう。

遷宮により、伝統は常に持続・継承されている。

古高取の伝統も、子供たちから大人まで、持続・継続されていくものと信じたい。

柴田　ムツ子

古高取の魅力を伝える

黒田官兵衛と長政

田丸　雄二

天正十四年（一五八六）この年、関白秀吉は九州を征圧し仕置により黒田官兵衛孝高に豊前六郡十二万石を授け、長年の功を賞した。京都、築城、上毛、下毛、中津、宇佐の地は南北に周防灘に接し、山国川が領内を流れる豊かな地域であり修験道、仏教が栄え、網敷天満、宇佐神宮が鎮座し、古代より開かれた交通の要所である。この時官兵衛四十一才長政十九才。

天正十九年（一五九一）大納言秀長の死去に続き千利休は命により切腹、享年七十才。翌天正二十年改元して文禄元年となる。官兵衛四十七才長政二十五才共に朝鮮に出兵し長政は三番隊に組し、官兵衛は軍監となった。遠征の途中帰国した官兵衛は謹慎して如水圓清と称した。文禄五年（一五九六）十月改元して慶長元年となる。

慶長三年一代の英雄太閤秀吉（六十三才）死去、遺言により朝鮮より撤退し、七年間の戦いは終わった。

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦は東軍の勝利となり徳川家康より長政は筑前五十二万三千石を授かり名島城に入城し、翌年より福岡城の造営にかかった。筑前六城が置かれ鷹取城一万八千石は母里太兵衛が授かった。長政の治政は安定し、如水は風雅を楽しみ京を往復している。

黒田官兵衛孝高

慶長九年（一六〇四）、京伏見に於いて如水五十九才で死去。法名を龍光院殿如水圓清大居士と云う。

慶長十一年（一六〇五）長政は如水、古田織部の参禅の師春屋宗園に請い大徳寺山内に龍光院を建立し江月宗玩によって開院された。客殿は長谷川等伯、雲谷等顔、書院、茶室は狩野探幽、松花堂昭乗の作品が調度され表門は「甲門」と言い国宝「密庵の席」と同様小堀遠州の好みである。この時遠州三十才。快心の作で龍光院は筑前の大守黒田家にふさわしい当代一流の人達によって造営された時代の魁となる記念すべき建築である。遠州はこの後多忙を極め徳川幕府の作事奉行とし、禁裏、城郭、寺社、茶室、庭園と江戸初期の文化文芸の先達となり伏見奉行、茶道指南役として慶長、元和、寛永、正保と長きに渡り影響を与え続けていく。

慶長十一年（一六〇六）手塚孫大夫、鷹取城主となる。永満寺宅間窯開窯。

慶長十九年（一六一四）内ヶ磯開窯（「筑前国続風土記」「高取歴代記録」）。

元和元年（一六一五）一国一城令により鷹取城廃城、古田織部自刃六十九才。

元和九年（一六二三）黒田長政、京にて死去五十六才　忠之、遺領を次ぐ二十一才。東蓮寺藩（直方）が成立する。遠州、伏見奉行になる。

寛永元年（一六二四）八山父子蟄居となり山田窯を開く。

寛永七年（一六三〇）白旗山窯開窯。

八山父子は朝鮮の役の最中に渡海。黒田家に仕えている。その年代は文禄元年（一五九二）～慶長五年（一六〇〇）の間で豊前中津に在住。八山父子は身分のある族長主で配下に陶工達がいたと思われる。黒田長政が筑前に国替えとなり、鷹取城下に移住し、慶長十一年（一六〇六）朝鮮式割竹様式の窯を築き永満寺宅間を開窯した。この功により初めて高取八蔵の名称と身分を得た。

豊前上毛町には黒田如水公の時代朝鮮陶工による焼物作りが行われ、その地は上毛町上唐原小山田池の付近で皿山と呼ばれ遺跡が今にあると伝承されている。現地は山国川沿い左岸の地で二つのため池が並び窯跡の火口は池に水没し窯床は林中にあるといういかにも宅間窯に似た環境で、水に縁があ

小山田池

る。遺物は町立の資料館に収納され昭和三十年代日本陶磁協会佐藤進三氏は上野焼古窯発掘時に来訪され一覧されている。

如水は信長、秀吉、家康と時代の英雄に接し、それぞれの人達に敬意と信頼を得ている有能な武人で有りながら和歌、連歌、茶の湯、参禅、キリシタンと文化風俗に敏感で、特に茶は江月宗玩の父堺の豪商天王寺宗及や今井宗久、千利休と交流し利休流を体得している。

慶長四年（一五九九）正月、茶屋の壁紙に定札を掲げている。

定

一、茶引候事　いかにも静ニ廻し　油断なく　とどこほらぬ様ニ引可申事

一、茶碗已下　あかづき不申候様ニ度々洗可申事

一、釜之湯一ひしゃく汲取候ハバ　又水一ひしゃくさし候てまどひ置可申候　つかひ捨のミ捨ニ仕間敷候事　右我流にてハなく利休流にて候間能々守可申候事

茶は特別の事ではなく日常の事とし、如水の名ごとくそのままに順応する定書で深く茶を体得した人の言葉です。黒田家は播磨在住時代より家伝の目薬を各地に販売する組織を持ち、京、大阪、堺衆との長年の交流により経済流通と経営を理解し、海外交易までもする博多の商人たちは自領安定の大きな柱となっている。高取焼創業は、如水、長政の進取な気質と洞察力によって大規模な運営と販売が可能となり時代の先端の産業となった。それにしても高取焼は水に縁のある窯であり創業者の場所の選定、位置取りなどの好みや経験、運営方針など似かよった点があるためなのだろうか、宅間窯、白旗窯など皆火口はため池に没し最大の窯産地内ヶ磯窯はダム湖に水没してしまった。

窯跡

参考文書

「京都名園記上巻」久恒秀治著
発行：誠文堂新光社

「方円の器」浅黄霞雲著
発行：文芸社

「大名茶陶高取焼」福岡美術館

古高取の広場

高取八蔵と白旗山窯

小山　亘

高取焼の開祖は高取八蔵である。八蔵の時代に築かれた窯は、宅間窯・内ヶ磯窯・山田窯・白旗山窯の四基で、白旗山窯は『筑前国続風土記』『高取歴代記録』によると、寛永七年（一六三〇）に開窯したとされ、この頃、八蔵父子は京都伏見の小堀遠州のもとに茶器製作の指導を受けに行っている。

本格的な茶陶を焼く職人は誰でも茶の湯を習い、それにしか使わない茶入・水指などの器の姿形と成形を覚える。窯詰め・窯焚き・築窯まで覚えるには、少なくとも十年はかかるし不眠不休の窯業の修行は、昔は必ず二人一組で行なわれていた。

そこで注目すべきは薩摩焼の開祖金海の記録である。

『三国名勝図会』によると「（前略）高城元六左衛門といへる高麗より帰化せし者と共に上方に赴き、瀬戸陶の法をも伝受せしむ。凡五年にして還り茶入水指等数々の器を製す」とあり、金海の瀬戸陶法修行が五カ年であって、しかも渡来朝鮮人の高城元六左衛門を同伴して上方に登っている。金海は薩摩藩主島津義弘に従って渡来した李朝陶工で、義弘から星山の姓を賜っていて『星山家系譜』や『星山家譜』にも同様に記録されている。金海も八蔵も焼き物戦争とも言われている文禄・慶長の役（一五九二～九八）で渡来した李朝陶工である。

八蔵父子が仮に金海同様に五年間京都で修行したとなれば、白旗山窯に入職するのは寛永十二年（一六三五）ということになり、それ以前に焼かれた多くの遠州好みの茶器は八蔵父子の作とは考えにくいことになった。

このことは、さらに四基の窯跡と出土陶片が明確に物語っている。

確立した技術には必ず家元があ

り、そこから発信が始まるものである。次回は、八蔵父子の師匠について考えてみたいと思う。

茶陶器は共箱・箱紐も重要

薩摩焼の花入れ

活動の記録

●古高取基礎研修講座

〈平成二十四年六月～十月〉
場所：直方市男女共同参画支援室（えみくる）

学習部会では、本年度は「食の文化史」とし、月一回の第三木曜日に、直方中央公民館の横の「えみくる」で午後二時から四時まで講義を行った。

① 六月二十一日（木）南蛮菓子茶の湯
② 七月十九日（木）牛乳の話
③ 八月二十三日（木）パンの話
④ 九月二十日（木）米の話
⑤ 十月二十八日（日）現地研修

という講義内容で、講師は部会長の副島が担当した。

一回目の講義では、「菓子」という言葉の語源と南蛮菓子の話を中心に、点心、和菓子等を説明し、その中でも砂糖菓子としてコンペイトウ（金平糖）について、信長とルイス・フロイスとの永禄十二年四月十九日の逸話、金平糖の作り方については「日本永代蔵」を資料として説明を付した。この金平糖が当時茶の湯の席で最高級の菓子であった。江戸時代になって、オランダ商館長が江戸に参府した折の将軍の子供達や大奥への土産品であった。

二回目の講義では、「牛乳」を取上げた。奈良時代から平安時代まで、天皇家を中心とした貴族たちは、乳製品を供御として使用していた。その後は使用されていなくて、江戸時代の八代将軍吉宗になって、インドの白牛を牡牝三頭輸入して、尾州安房の嶺岡牧場で飼育し、牛乳に砂糖を入れて煮詰め、石鹸の様に固めた固形練乳の物、白牛酪を作らせた。寛政年間の家斉の時には、その数七〇頭を超え、何頭かを江戸城の竹橋の厩に移し、白牛酪を作らせた。明治になってこの乳牛を政府の手に収め、拡張につとめた。牛乳は政府高官や外国公使館員の需要に応じたものの、後、民間に払い下げて庶民に広がっていった。

三回目は「パン」を中心に進めた。パンは南蛮人によってもたらされた。当初日本人には普及しなかったが、携帯に便利であるため、幕末には兵食とし利用された。

長州藩では萩焼を焼いた窯を利用してパンを焼いている。当時のパン焼窯としては最適のものであった。窯の火加減のうまさでは陶工の大賀伊助は最適の人物であったと伝えられたいる。。海軍は乾パンを、少しおくれて海軍も乾パンを軍用食とした。乾パンは現在も兵糧品や非常食として使用されている。

日本人がパンを食べる時は米食的なパターンの影響を受けて、言ってみれば米を食べる要領でパンを食している。パンの品質についても西欧人よりも贅沢の様で、世界で最上といわれるカナダ産のマニトバ小麦でつくったパンでないと消費者に嫌われる。西欧人が品質の悪い自国産小麦のパンで我慢しているのと比較して、デリケートな舌をもった日本人であるか物語っている。

四回目は、日本人の主食である「米」を取上げた。1、稲作のふるさとからわが国へ、2、米はどれくらい食べられるか、3、米を食べ始めてからの生活について、ということで話をまとめた。

米とやきものとの関係は実をとった後のワラは灰にして釉薬に使用した。これがワラ灰釉で、焼き上がりは白色（ワラ白）を呈する。また籾がらを置台（ハマ）の上に敷いて茶碗等の製品を載せたもので、剥離剤として「もみがら」を使用している。

現地学習は、福岡城址を散策した。

福岡城の成立は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦後、黒田長政が筑前国五〇万余石（後五二万余石）を徳川氏から与えられ、初代藩主として、名島城に入った。翌年、那珂郡警固村福崎に、長政自らが設計し、野口一成を普請奉行に、城を築いた。備前国邑久郡福岡に由来して命名している。

●子供焼物教室
～世界でひとつのマイ茶碗作り～

〈平成二十四年五月～十一月〉
場所：直方市内の小学校

五年目の市内十一校六年生のマイ茶碗（四八〇個）を子供達に届けることが出来ました。

スチールペーパーで底を自分で磨くようにお願いしました。手にした子供たちの笑顔が見えるようです。

学校に出向いた私達に低学年の子供達が聞いてきます。「六年生になったら作れるんやろー？」

この活動は継続していかなければと確信した本年の活動でした。

父兄の参加も年々増えています。学校側が家庭に通信されているようです。各学校で異なりますが、お茶会まで実施されるようになりました。

上頓野小学校は地域の文化祭に出品されました。

マイ茶碗を作り、日本の和の世界を学び、関わってくれた人達に対する感謝を学び、卒業していきます。

それぞれが直方への愛と誇りが持てる大人へと成長してくれる事を願いつつ活動を続けたいと思います。

昨年までは内ヶ磯の土にこだわっていて初心者では使用しないであろうと言われている土との戦いでした。

熱気ムンムンの体育館であちらでもこちらでもヘルプの声がかかり私達ほとんどが初心者に近い指導者です。冷汗をかきながら悪戦苦闘しました。怖いもの知らずだから乗り越えられたのだと思います。子供達に育てられました。

今年からは初心者に扱いやすい土に変えました。

焼物教室をお手伝いして下さっている方は市外からも友達の輪にて活動に快く参加していただいています。感謝申し上げます。

男性は二人がいてくださるので心強いです。あとはか弱き女性ばかりです。

男性募集中です。年令は問いません。

二〇一四年のＮＨＫ大河ドラマは「黒田長政」と報道されています。高取焼のお茶碗でお茶を飲むシーンがあるかもしれません。

内ヶ磯四〇〇年の年です。何かアピールできないでしょうか。

末松　登志子

～・～・～・～・～・～・～・～

焼物教室の様子を少しだけ紹介致します。

「第一回」

〈平成二十四年五月二十九日（火）〉
場所：直方西小学校

「第二回」
〈平成二十四年六月六日（水）〉
場所：直方南小学校

「第三回」
〈平成二十四年六月十九日（火）〉
場所：直方北小学校

「第四回」
〈平成二十四年六月二十日（水）〉
場所：直方東小学校

「第五回」
〈平成二十四年六月二十六日（火）〉
場所：感田小学校

「第六回」
〈平成二十四年七月四日（水）〉
場所：植木小学校

「第七回」
〈平成二十四年九月十一日（火）〉
場所：上頓野小学校

「第八回」
〈平成二十四年九月十二日（水）〉
場所：福地小学校

「第九回」
〈平成二十四年九月十四日（金）〉
場所：下境小学校

「第十回」
〈平成二十四年九月二十一日（金）〉
場所：新入小学校

「第十一回」
〈平成二十四年十一月十四日（水）〉
場所：中泉小学校

●地域対象焼物教室
～ひまわりキャンプ保護者～
〈平成二十四年八月十八日（土）〉
場 所：直方いこいの村（直方市大字畑）

陶芸が初めての方も多く、最初は少し緊張されていたように思いますが、悪戦苦闘しながらも次第に集中して、最後は皆様それぞれが素敵な作品に仕上げられました。楽しいひとときでした。ご参加くださいました皆様、ありがとうございました。

●古高取窯跡探訪ウォーキング
〈平成二十四年十月十四日（日）〉
集合：福智山ダム駐車場 十時～

福智山ダムよりもとどりハウスまで約四キロを、大人十二名、子供二名で元気に完歩しました。

晴天に恵まれ、秋がすこしずつ深まっていく山々や木々を眺めながらのウォーキングでした。

途中吉田窯に立ち寄り、筑豊美術展に出品されたすばらしい絵皿を拝見し感動しました。

また二人の女の子（四歳と六歳）は、あちこちで小さな秋をみつけながら楽しく歩いていました。

もとどりハウスでは栗ごはんやだんご汁、かぼちゃコロッケなどのご馳走をおいしくいただきました。

秋を満喫したウォーキングでした。来年はもっと多くの方々に参加してほしいなと思いました。

永冨　セツ子

●古高取バーチャル博物館
〈平成二十四年十月～〉

広報部会は、現在、古高取のバーチャル博物館（簡易版）をビデオ映像で制作中です。まずは直方市中央公民館のものですが、少しでも直方市中央公民館を訪れたような感覚になってもらえるよう頑張っています。今年度中の完成を目指していますので、皆様、どうぞお楽しみに！

なんでも掲示板

●「金剛山もととり里山保全協議会」だより

〈平成二十四年六月～十二月〉

今年、実施しました主な行事です。

六月、焼物教室（一学期終了）のご苦労さん会（あじさいのとても美しい時でした）

里山を満喫です

九月、収穫祭（栗拾い）

十月、内ヶ磯から里山までの窯跡探訪ウォーキング

十一月三日～十二月十六日まで「ちょっくら（直鞍）ふれ旅」

※福岡県広域プロジェクト（里山ガイドと楽しむ秋の里山散策＆森のご馳走ランチ）で募集

金剛山の名も、もととりの名も吉祥の力を持っています。里山に気軽に遊びに来てください。

末松　登志子

●須崎町公園ステージでパネル展示

〈平成二十四年八月二十五日（土）・二十六日（日）〉

場所：直方市須崎町公園

毎年恒例の二十四時間テレビの募金活動に合わせたライブイベントで、古高取のパネルを展示しました。

●第四十五回 高取焼陶器まつり

〈平成二十四年十月二十六日（金）～二十八日（日）〉

場所：直方市畑・永満寺地区

直方の地元窯元や畑公民館等で、陶器販売はもちろん、地元の農産物や特産物等の販売も行われました。毎年、春と秋に開催されています。

〈掲載内容募集〉

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。掲載可能な情報等がございましたら、事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

今年もあと僅かになりました。何かと忙しい季節ですが、皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

今回の会報は、十二月に発行をずらして、今年の活動をまとめました。今後は、会報の内容等も更に吟味し、様々な方に楽しんでいただけるように頑張りたいと思います。

今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒、宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO13

〈発行〉
古高取を伝える会

〈発行日〉
平成二十四年十二月十一日

〈現在の会員数〉
正会員　五十四名（五十六口）
賛助会員　十七名（二十一口）
団体　一団体（一口）

〈マイ茶碗の数〉
３７６１個

〈事務局〉
〒八二二－〇〇二六
福岡県直方市津田町七－十四
ＴＥＬ〇九四九（二三）一三二一